『みことばを行う人』　ヤコブの手紙1章 19～27 節

1.　律法

モーセ契約を通してイスラエルの民に与えられたのは「**律法**」と、幕屋です。約束の地に向けての旅を始めたばかりのイスラエルの民は、自分たちをエジプトから救ってくださった神がどのような方であるのかをまだ知りませんでした。ご自身がどのような方であるのかを伝えるために神がとられた手段が、「**律法**」です。イスラエルの民は「**律法**」に従って生活することを通して、神について学んでいったのです。

「**律法**」に従って歩むイスラエルの姿は、神にとっても重要なものでした。神は、出エジプト記 19 章 4～6 節で「**…今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。**」と語りました。なぜなら神は、人の応答によってご自身についてこの世界で証しされることを望むからです。それがイスラエルの「**祭司の王国、聖なる国民**」としての歩みでした。

22 節に「**みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。**」とありますが、私たちの応答は、自らの救いのためにではなく、神を証しするために重要なのです。しかしやがて、応答として「**律法**」に従う姿勢は硬直したものへと変容してしまいました。「**律法**」を守ることは自分と他者を区別するものではあっても、神の愛を証詞するものではなくなったのです。イエス様はそのような「律法主義」を厳しく非難されました。ヤコブは「**みことば**」をただ聞くばかりではなく実行する大切さを強調しています。これはイエス様がマタイの福音書 7 章 21～23 節に「**わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』**」と語たり、パウロもローマ書 2 章 13 節で「**なぜなら、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行う者が義と認められるからです。**」と語ったことからもわかるように共通する教えです。

ヤコブが関心を寄せているのは「真の信仰からはどのようなことがもたらされるのか」という問題です。それに対して、パウロは「何が信仰の基礎をなしているのか」という問題を重点的に扱っています。私たちの行いは、私たち自身の言葉やメッセージを裏付けるものであるか、あるいは打ち消してしまうものであるかのどちらかです。もしも私たちが自分で教えていることとは違うことを行うならば、私たちの教えは意味も信頼も失ってしまいます。イエス様はマタイの福音書 23 章 3 節でパリサイ人について「**ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。**」と民に教えてました。

2.　交わりにおける心構えが三つ教え

さて、当時のユダヤ人キリスト者たちは、二重の試練を受けていました。

① 異教の人々からの圧迫です。すなわち、キリスト教信仰以外の宗教をもつ人々から圧迫されていました。

② 同胞のユダヤ人たちから圧迫です。イエス様を約束の救い主と信じたユダヤ人たちは、少数者でした。多くのユダヤ人たちは、イエス様を約束の救い主とは信じず、ユダヤ人キリスト者たちを、どこにおいても圧迫しました。

そのため、ユダヤ人キリスト者たちは、良い交わりを築き、共に信仰を励まし合いながら、永遠の生命の道を歩んでいくことが必要でした。そして、実際、隣人愛、兄弟愛をもって交わりをし、喜んで信仰の歩みをしていました。しかし、もちろん、完全であったわけではありません。大切な交わりを壊しかねない罪や弱さもいろいろありました。

その一つが、お互いの「怒り」でした。私たち自身の経験からもわかりますように、怒りやすいものです。いろいろなことで直ぐに「怒る」ものです。小さなことでも、激しく「怒ったり」します。そして、お互いに「怒り」合えば、良い交わりを壊しかねません。キリスト教信仰というものは、神の恵みをお互いに理解できる者として、一緒に

交わりをしながら、永遠の生命の道を喜んで歩んで行くものです。キリスト教信仰は、交わりから離れて、一人で孤立して歩むものではありません。キリスト教信仰は、いつでも、神の愛と恵みを共感できる信仰の仲間たちと、交わりの中でしていくものです。そのためには、自己中心の「怒り」は避けなければなりません。

そこで、ヤコブは、19～20 節で「**人はだれでも、聞くのに早く、語るのに遅く、怒るのに遅くありなさい。人の怒りは神の義を実現しないのです。**」と教えました。この三つの言い方は、交わりにおける互いの心構えを教えています。

① 聞くのに早く

「**聞くのに早く**」とは、交わりにおいては、他の人の言うことによく耳を傾けなさいという意味になります。

② 語るのに遅く

「**語るのに遅く**」とは、他の人に話す時には、「舌」、すなわち、言葉で傷つけないように慎重に話しなさいという意味になります。26 節で「**自分の舌を制御せず**」とありますが、そのようにならないようにという意味です。

③ 怒るのに遅く

そして、「**怒るのに遅くありなさい。**」というのは、「交わりの中でお互いにに怒りを表して、良い交わりを妨げたり、良い交わりを壊したりすることがないように注意しなさい」という意味です。「怒り」ということを聞きます時に、私たちは、「怒り」には正当な怒りもあるはずだと思うのです。その証拠に、イエス様御自身も、宗教の指導者であった律法学者やパリサイ人の偽善に激しく「怒り」を表したことはよく知られています。また、父なる神も、人間の罪に対して、激しく怒ります。ですから、怒ることそれ自体が悪いという教えは聖書にはありません。正当な「怒り」というのが十分あります。そして、もちろん、キリスト者にも正当な「怒り」というのが＋分あります。そういう場合の怒りは、「神の義」すなわち、神の正しさを実現する怒りですので、否定する必要はありません。

但し、ここで、ヤコブが語っているのは、そのような神の正しさを実現する正当な「怒り」のことを言っているのではないのです。そうではなく、お互いに、その中で一緒に生きていく良い交わりを妨げたり、壊してしまうかもしれない自己中心の「怒り」のことを言っています。そのため、お互いに、そのように怒りを表せば、交わりが難しくなるでしょう。交わりは妨げられ、あるいは、壊れるかもしれません。そこで、そのような「怒り」を、神は望まないのです。そのような「怒り」は、神の正しさを実現しないのです。そこで、ヤコブも、「**人の怒りは神の義を実現しないのです。**」と教えました。「**神の義**」とは、神の求める正しさのことです。神の求める正しさは、交わりを妨げたり、壊したりしかねない自己中心の「怒り」よっては、実現されないという意味です。ヤコブは、なぜこんなことを言ったのでしょう。その理由は、当時の状況を考えてみればすぐにわかります。彼らは、違う宗教の人々からの圧迫と、同胞のユダヤ人たちからの圧迫と、二重の圧迫を受けていました。そのような中で、お互いに「怒り」合っていたのでは、教会は、内側からガラガラ崩れるでしょう。そして、外からの二重の圧迫にとても耐えられなかったでしょう。ですから、彼らがすべきことは、お互いに「怒り」によって交わりを妨げたり、壊すことではありませんでした。良い交わりを築いて、まとまってみんなで喜んで歩んでいくことでした。

3. 良い交わりを築くために

そのように、お互いに「怒り」を避けるべきことがわかりましたが、では、良い交わりを築くために、みんなが積極的にすべきことは何でしょう。すると、それは、キリスト者になる前の罪の古い生活を捨て去り、イエス様を信じた時に心に植え付けられた神の「**みことば**」を、一人一人がしっかりと自覚的に受け入れ続けることです。

「**すべての汚れやあふれる悪**」というのは、この言い方で、イエス様を信じる前の罪の生き方を表します。当時のユダヤ人キリスト者たちのイエス様を信じる前の生活は、当時の道徳的な汚れや道徳的な悪がいっぱいある生き方であったと思われますが、キリスト教の伝道者から、神の言葉を聞いて、キリストを信じた時から生き方が新しく変わりました。それは、私たちが、今日、キリストを信じた時から、自分の生き方が変わるのと同じです。イエス様を信じた時から、神の言葉が、私たち一人一人の心に植え付けられました。「**心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。**」とありますが、当時のユダヤ人キリスト者たちも、キリストを信じた時から、心に神の言葉を植え付けられま

したが、その神の言葉を続けて受け入ることが大切です。

「**捨て去り**」という言葉は、もともと、古くなって役に立たなくなった服を脱ぎ捨てることを表す言葉が使われています。そうです。キリスト者は、イエス様を信じて恵みにより救われた時には、もはや、それまでの生き方を、古くなって役に立たなくなった服のように、捨て去ったのです。そして、その時から、キリスト者は、神の言葉が心に植えつけられたのですが、植え付けられた神の言葉を、さらに信仰によりしっかりと自覚的に続けて受け入れていくことが大切です。そうすれば、救いを約束した神の言葉により、最後の審判でも裁かれることがなく、確実に救われるのです。「**あなたがたのたましいを救うことができます。**」とありますが、この場合の「**救う**」は、世の終わりの最後の審判から救われることを意味しています。

こうして、当時のユダヤ人キリスト者たちが、なすべきことは、みんなが以前の罪の古い生き方を捨て去り、イエス様を信じた時、一人一人の心に植えつけられた神の言葉を、さらにしっかり自覚的に受け入れ続けて、救いを確実に自分のものにすることをみんなで目指すことでした。この方向で進んでいけば、交わりがいっそう堅固になり、キリスト教以外の宗教からの圧迫にも、また、同胞のユダヤ人からの圧迫にも耐えることができたのです。内側がまとまれば、外からの圧迫にも耐えられます。

4. 御言葉を行う人と行わない人

以上のようにして、ヤコブは、当時の本国以外の地のユダヤ人キリスト者たちが、イエス様を信じた時に、一人一人の心に植えつけられた神の言葉を、これからもしっかり受け入れ続けて、救いの完成を目指して歩むように勧めましたが、同時に、ユダヤ人キリスト者たちが、この世において「**みことば**」を実践することをとても強く勧めました。

22～25 節を見ますと、「**みことばを行う人**」と「**みことばを聞いても行わない人**」が並べられ、読者が、「**みことばを行う人**」になるように命じていますが、この仕方は、イエス様の山上の説教の締めくくりを思い出させる仕方になっています。イエス様の山上の説教の締めくくりは、イエス様の言葉を聞いて行う者は、岩の上に家を建てた賢い人に、イエス様の言葉を聞いても行わない者は、砂の上に家を建てた愚かな人にたとえられ、読者は、イエス様の言葉を聞いて行う賢い人となるように勧められていたわけですが、その仕方と同じ仕方が、ここでも使われています。

では、神の言葉を聞いても行わない人は、ヤコブによってどのように例えられたでしょう。すると、「**その人は自分の生まれつきの顔を鏡で眺める人のようです。眺めても、そこを離れると、自分がどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。**」というのです。これでは、「**鏡**」を見た意味がなくなるというのです。ヤコブは、「**みことば**」という「**鏡**」に照らして、自分の不十分さに気がつき、「**みことば**」の教えのようにしなければとそのとき思っても、すぐに忘れて、実践しない人は、自分の顔を「**鏡**」に映して、整えなければとそのとき思っても、すぐに忘れてしまって、それっきりになってしまう人に似ていると語りました。

では、「**みことば**」という「**鏡**」をのぞき込むようにしてじっくり見て、自分の整えるべきところを、「**みことば**」からしっかり聞いた人はどうするでしょう。すると、「**みことば**」により、生まれつきのままの自分が罪人であることを悟り、このままではいけないことを知り、「**みことば**」こそ人を整える完全な基準であり、「**みことば**」こそ真の自由を与えるものとして、「**みことば**」で教えられたことを実際に行い、神に喜ばれ、豊かな祝福を受け、真の幸せに導かれるのです。

23 節と 24 節に「**眺める**」という言葉が、「**みことば**」を聞いても行わない人との関係で 2 回出ています。すなわち、「**みことば**」を聞いても行わない人は、自分の顔を「**鏡**」に映して単純に見るだけ、ぱっと、ちょっと見るだけの人であるという意味で使われています。ですから「**眺める**」という言葉は、「**単純に見る**」、「**ちらりと見る**」という意味です。ところが、「**みことば**」を聞いて行う人は、「**しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて**」と言われています。すなわち、「**みことば**」という「**鏡**」を身をかがめてのぞき込むようにして注意深く見て、自分の不十分さを知り、このままではいけないとして、「**みことば**」で教えられたように行うのです。「**みことば**」を聞いても行わない人の場合は「**眺める**」という言葉が使われ、「**みことば**」を聞いて行う人の場合は、「**一心に見つめ**」という言葉

が使われて、区別されています。

ちなみに、「**自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ**」とありますが、「**律法**」というのは、戒めや掟という意味もありますが、ここでは、神の言葉の別の言い方として使われています。そして、神の言葉は、人を整える完全な基準ですので「**完全な律法**」と言われています。また、神の言葉に従うことは、人を罪から解放し、真の自由を与えるので「**自由をもたらす完全な律法**」と言われていますが、私たちは、特に、「**一心に見つめ**」という言葉に注目しましょう。

「**一心に見つめ**」というのは、辞書ですと「**他のことを考えずに心を一つに集中させるさま**」となっていますが、つまり「**身をかがめてのぞき込むようにして注意深く見る**」という意味の言葉です。ですから、「**みことば**」を聞いても行わない人と「**みことば**」を聞いて行う人は、「**みことば**」への姿勢が違うことを教えています。「**みことば**」を聞いても行わない人は、「**みことば**」という「**鏡**」を見ますけれども、ちょっとだけ見る、ちらりと見ることをする姿勢になります。そのため、「**みことば**」という「**鏡**」に映った自分の不十分さを知ります。しかし、すぐに忘れて、「**みことば**」で教えられたことを行うことまではいきません。でも、「**みことば**」を聞いて行う人は、「**みことば**」という「**鏡**」を身をかがめてのぞき込むようにして注意深く見るのです。そして、「**みことば**」という「**鏡**」に映った自分の不十分さをよく知り、忘れることなく、「**みことば**」で教えられた通り行います。そして、神から喜ばれ、豊かに祝福され、真の幸せを得るのです。

このように、今日の私たちも、「**鏡**」を見て、自分を整えることをしますが、このことは信仰的、霊的にも当てはまります。私たちは、神の言葉である聖書というよく映る「**鏡**」に照らして、自分白身を神と人の前にきちんと整えることが必要です。神の言葉である聖書は、私たちの真の姿を映し出す必要不可欠の「**鏡**」であることを覚えましょう。

5.　自由をもたらす完全な律法

私たちには新しい契約によって、「**自由をもたらす完全な律法**」が与えられました。それがイエス様の十字架と聖霊です。私たちの応答としての愛の行いは、虚栄心や恐怖心によってではなく、イエス様の愛による祝福を「**一心に見つめ**」ることから始まります。そこから始まる行いには、大きな祝福が約束されています。

「**みことばを行う人になりなさい。**」（22 節）とありますが、イエス様もマタイの福音書 7 章 24 節で「**ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。**」と教えました。試練の中で「**みことば**」を実行することによって、「**みことば**」が力となり、「**みことば**」に支えられる喜びを知ることができます。さらに「**みことば**」を聞いて実行するということについて 25 節で「**しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。**」と記されています。

「**自由をもたらす完全な律法**」とあるが、「**律法**」は自由を奪い、「**律法**」を守れない、「**律法**」を実行できない人間の惨めさと罪を明らかにするものです。しかし、「**自由をもたらす完全な律法**」とはどういうことでしょうか。イエス様は、マタイの福音書 7 章 12 節で「**ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。**」と教えています。「**律法と預言者**」とは旧約聖書全体のことです。すなわち「**人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。**」これが完全な律法です。この黄金律は「**求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。**」（7 節）から始まります。そして「**それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。**」と語られて、黄金律が示されています。父なる神が、人間が求める以上のものを、何よりも父なる神が子なる神を与えてくださったのです。欲望が入口になって罪が入り込み、罪のゆえに滅んでしまう私たちのために十字架に死に、復活された主と一つになって生きる、新しい人間に造りかえて下さったのです。欲望から、自分から、自己中心から自由にされた者として「**人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。**」との「**みことば**」が示されています。